

『リビングデザイン論』講義からみた短大生の 住意識について

—2010～2015年度 6年間の記録—

A Study on the Residential Consciousness of Junior College Students viewed
from the Course of the Living Design

—6-year records from fiscal 2010 to 2015—

浅見 美穂
(Miho ASAMI)

キーワード：住意識、住教育、ライフスタイル

Key Words：Consciousness on Living, Living education, Life style

I. はじめに

住環境について学ぶ機会は、小学校では生活科や家庭科、中学校では技術・家庭などで触れられている。さらに生活科学科・家政学部系の短大・大学や教員養成系の大学において、住居学を学ぶ機会がある。またインテリア系の専門学校や資格養成講座も多く存在する。その内容も社会的要請を反映して、ファッションな感覚的なものから、生活に密着した暮らし方や歴史、構造や性能、設備環境や法令的なものまでを含む、より幅広い内容となっている。今後、居住者の住まいに対する意識の高さと、それを支える教育基盤の充実を図ることが、我が国の住環境水準が上がることへ繋がると考えられる。

このような背景から、本学の生活科学科においても2010年度より「住まいとインテリアフィールド」¹⁾がスタートした。『生活全般に関する事柄について、基礎となる知識を身につけ、問題を適切に判断する』『社会や家族のために修得した知識を活用し、健康で快適な生活を創造する』²⁾ことができるように学ぶことをベースにし、様々な生活者の立場から、安全でかつ健康的に生活できる住まいを実現させることを目標に、学習計画が立てられた。

生活科学科1年生春学期の「リビングデザイン論」は、インテリアフィールドの中の総論と導入の役割を担う授業と位置づけられた。「リビング」は「生活・暮らし」、「デザイン」は「計画・意匠」を意味し、実質的には『住居学』を概論的に学ぶ授業である。シラバスは、学生たちが快適な住空間への視点を持ち、賢い住み手になるための知識や手法を習得することを念頭に構成している。シラバスの内容は毎年、学生の興味や資質に沿って6年間で多少変化しているが、学生にとって身近な住環境の要素から学ぶ方針や方法論は変わっていない。

あさみみほ：目白大学短期大学部生活科学科特任教授

本稿は、生活科学科「リビングデザイン論」の、2010～2015年度の6年間の授業内に用いたワークシート・課題の記録とその分析を通して、当学科学生の生活観や住居観をひも解き、6年間の変化や学生たちの学びの効果を探ることを目的とする。

II. 研究の概要

研究対象と方法は以下のとおりである。

研究対象：生活科学科の講義「リビングデザイン論」2010～2015年度履修者 計174名
 2010年度履修者25名、2011年度履修者25名、2012年度履修者30名、2013年度履修者36名、2014年度履修者25名、2015年度履修者33名

研究方法：授業課題の提出物 ワークシートの記述と作図の分析

実施時期：2010年4月～2015年7月

対象とする授業内ワークシート・課題は、以下の5つとする。

- ① 快適な場所
- ② ライフサイクルの変化
- ③ これからのライフスタイル
- ④ あなたの部屋
- ⑤ 家にある家電製品

なお、課題提出物は成績付け終了後に、学籍番号と氏名を切り取り順不同にファイリングしたものを取り扱い、学生の個人が特定されないよう配慮をしている。また、学生には課題提示の際に、提出物は研究として使用する主旨の断り文を入れている。

III. 分析結果

1. 快適な空間

快適な室内環境のセクションでは、快適な住環境の要素として、温熱環境や通風・換気、採光や照明、騒音や防音など物理的環境から設備アイテムについて学ぶ。その授業での導入として用いたワークシートの内容を分析する。学生への質問内容は「あなたにとって快適な（好きな）空間、場所をおしえてください。またその理由を考察してください。」とし、①10歳の頃（小学校3・4年生の頃）

あなたにとって快適な（好きな）空間、場所をおしえてください。またその理由を考察してください。

	① A. 家の快適と思った（好きだった）場所 記入例：私の部屋、リビング etc () <理由>	B. 屋外の快適と思った（好きだった）場所 記入例：近所の公園、友達の家のお庭 etc () <理由>
あなたが10歳の頃（小学校3・4年生の頃）	リビングにソファとテレビが置いてあり、両親が居る感じが好きだった。窓の景色もよく、朝の光がさすのが好きだった。またテレビでアニメを見ることができて楽しかった。	近所の公園。木陰が気持ちよく、友達と遊ぶのが好きだった。自然の音が心地よかった。
現在	私の部屋。静かであり、採光がよい。また、家具が気に入っている。特にソファが快適だ。	大学の図書館。静かであり、採光がよい。また、勉強ができる環境が気に入っている。

図1 「快適な空間」ワークシート記載例

のA. 家での快適と思った（好きだった）場所、B. 屋外の快適と思った（好きな）場所、②現在のA. 家での快適と思う（好きな）場所、B. 大学内の快適と思う（好きだった）場所を、その理由とともに書き出させている。

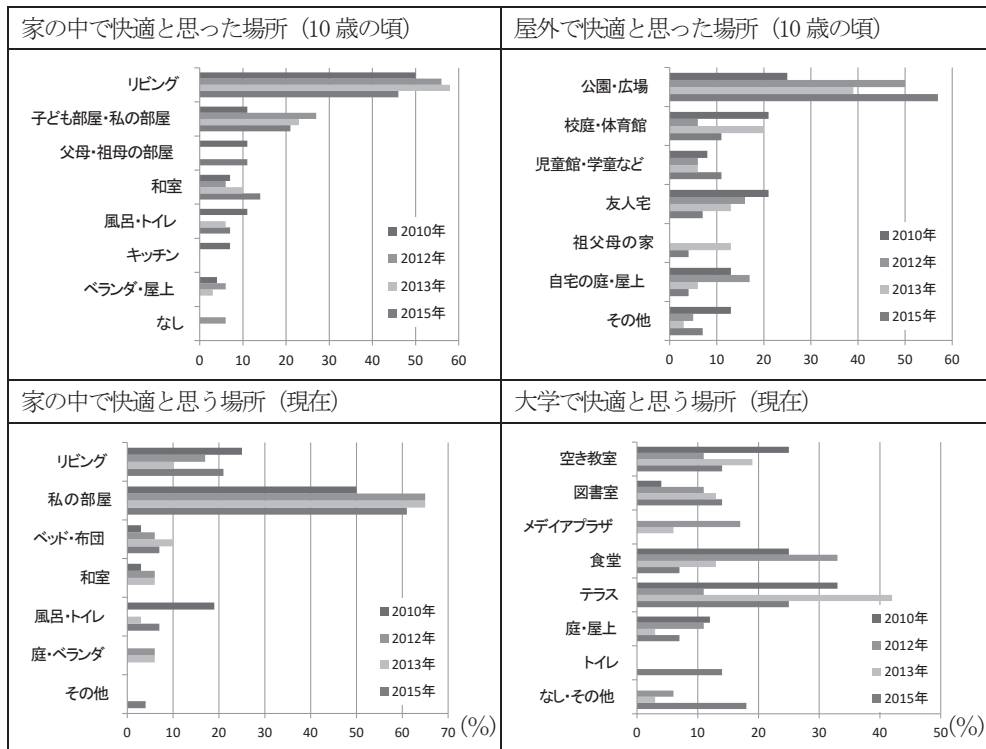
快適とはどういう状態なのか（だったのか）、どのような要素を快適と感じるのか（感じたのか）を学生たちに考えさせている。子どもの頃と現在では自分の感じ方に変化があるのか、住環境の状況の変化への気づきもねらいとしている。

2010年度22名、2012年度18名、2013年度31名、2015年度28名の4年度分、計99名のワークシートの記述を分析した。ワークシート記載例を図1に、分析結果一覧を表1に示す。なお複数回答も反映させ、表示は各年度の人数比（%）で示している。

家の中で快適と思った場所（10歳の頃）では、どの年度も50%前後の学生が「リビング」と記載している。その理由としては『広い、窓が大きい、景色がよく見える』『夏はクーラーが効いていて涼しい、冬は床暖房があって暖かい』『テレビを見ながら寝ころべる』『リラックスできる』『お菓子がある』『家族が集まる場、ベットと遊べる』『人がいて安心できる』などが挙がり、子ども部屋などその他の部屋を引き離している。少数であるが「和室」では『畳や木の香りが落ち着く』、「トイレ」では『壁に囲まれて安心』などの理由が書かれている。

屋外で快適と思った場所（10歳の頃）では、「公園・広場」がどの年度も多く、「校庭・体

表1 快適な空間 分析結果一覧



育館」「友人宅」が続いている。その理由としては『家から近く、学校帰りによく行った』『友達と集まって思いっきり遊べた』『木がたくさんある、遊具も多い』『広くて自由に走りまわられた』などが挙がり、放課後の外遊び時間と連動して快適な空間を思い出している学生が多い。各年度ともほぼ同じ傾向であるが、「公園・広場」などは変わらず高いポイントである一方、「友人宅」が年々減少している。このことは、公園は個体間距離が大きく（長く）薄い、友人宅は個体間距離が短く濃いと考えると、年を経るごとに子どもたちの個体間距離が大きく（長く）なってきたと読み取ることができる。SNSなどでバーチャルな個体間距離は縮まった反面、リアルな人間関係は距離を置きたい、という現代っ子の心情の表れであろうか。

家の中で快適と思う場所（現在）では、どの年度も「自分の部屋」が50～60%前後、「リビング」が10～20%前後となり、10歳の頃の記載と逆転している。さらに「ベッドや布団の中」や「風呂・トイレ」も10歳の頃より増えている。自分の部屋が快適な理由としては『使いたい物がすぐ近くにある』『一番落ち着く、楽』『一人でゆっくりでき、他の人に邪魔されない』『リラックスできる』『自分で好きに模様替えできる』などが挙がっている。「リビング」の理由にも『安心感がありリラックスできる』『みんながいてにぎやか、楽しい』があるが、成長するとともに家族と一緒にの安心感より、一人の気楽さに快適を感じるようになることが読み取れる。

大学で快適と思う場所（現在）では、年度により多少ばらつきがあるが、「テラス」「食堂」「空き教室」など、授業の空き時間や昼食時に友人と、または一人で過ごす場所を挙げている学生が多い。理由としては「テラス・ウッドデッキ」では、『開放的でのんびりできる』『椅子や机の色あいがきれい』『人が多く、楽しい』、「食堂・屋上」では、『友達とご飯を食べながら会話ができる』『太陽の光でほかほかしている』、「空き教室」では『窓からの眺めがよい』『いつも使っている安心感がある』、「図書館」では、『涼しくて静か、椅子が座りやすい』『集中力が高まる・一人になれる』などの記述がある。

学生たちの回答結果は、ワークシートに記載した翌週の授業において紹介し、快適と感じる要素として、広さや明るさ・音などの物理的な要素や、空間に置かれる家具や道具、さらにその場所での行為内容と人との距離感も大事な要素になることを確認した。学生たちは自分の体験から快適の概念を理解することができ、その後の温熱環境や照明器具などの学習へスムーズに進むことができた。

2. ライフサイクルとライフステージ

2-1. ライフサイクルの変化

住環境を考察する上で、人の一生や家族を歴史的時代的背景から考える視点は外すことができない。様々な年代の多様なライフスタイルへの想像や理解も、暮らしに就労にと、多方面で将来必要になるであろう。学生自らの現在と将来の生活がどうなるのかは、学生にとって親や祖父母の生活を知り、統計などを読み取ることからある程度は予測できる。学生がこれからの

自分のライフステージとライフスタイルを予想し、計画するための導入として用いたワークシートの内容を分析する。図2に「ライフサイクルの変化」ワークシートの記載例を示す。

少子高齢化が進む現代、人々、特に女性の生活とそれを取り巻く社会的背景はこの80～90年で大きく変化している。厚生労働省の統計³⁾より作成した、大正期（1920年）頃と現在（2013年）の平均的な人の一生（結婚を起点にしたファミリーサイクル）を比較検討することにより、何がどう変わり何が変化していないのか、その原因を考察し、今後学生自身のライフスタイル構築にヒントを得ようとするねらいがある。

大正期（1920年）と現在（2013年）の二つの棒グラフは、結婚～長子誕生の期間を青色、長子誕生～末子誕生を桃色、末子誕生～末子学卒を水色、末子学卒～夫引退を紫色、夫引退～夫死亡を黄色、夫死亡～妻死亡までを橙色のように色分けし、それぞれの色幅どおしを線で結び合わせることで、ライフステージの長短の変化がわかるように作成している。そのことに気づいた学生は色の順に、この90年の変化を書き出すことができる。すなわち、大正期に比べて現代は、結婚する時期が遅くなり、産む子ども数減ったために出産期間が短くなり、夫の定年や引退時期も遅くなり、男性も女性も寿命が延び、引退後の人生が長くなったことを視覚的に理解することができている。さらに水色の終点が大正期と現代でそう変化がないことから、子どもの数が減っても子の扶養期間は短くなっていないことに気づくことができる。そしてその原因は、中学卒業と同時に働くのが通常だった大正期と、学生自身も含めて高学歴になった現代の暮らしの変化の背景を知ることになる。

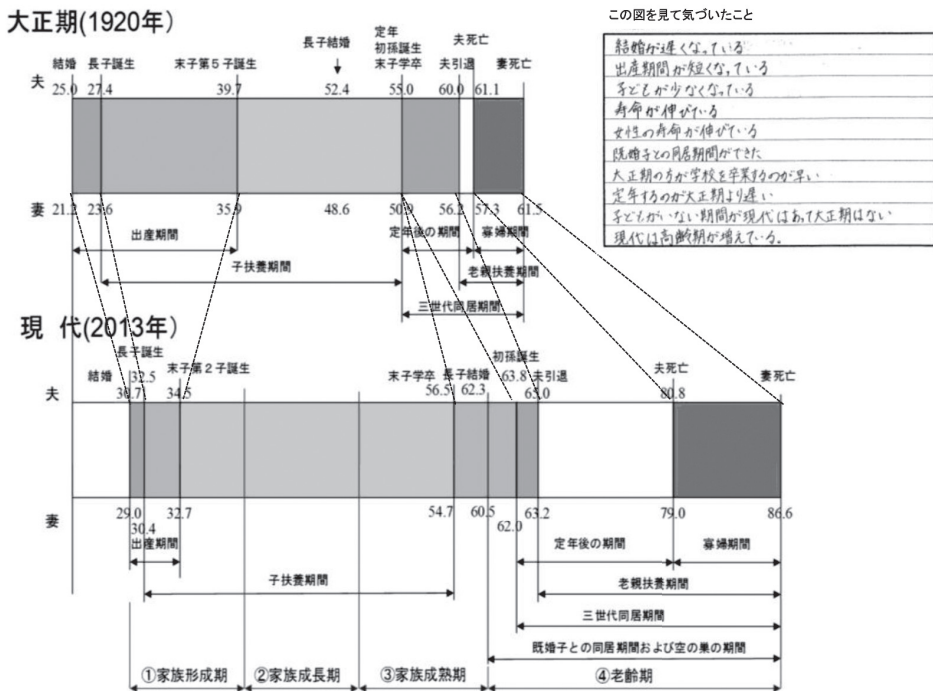


図2 「ライフサイクルの変化」記載例

さらに、二つの棒グラフを見比べることから、現代には、大正期にはない黄緑色の部分が新たにできていることに気づく学生もいる。黄緑色の部分は、末子学卒が始点で初孫誕生が終点である。この部分が何を示しているのか、教員はあえて説明を加えず、学生の自由な考察からこの時期のネーミングを促すことにしている。このワークシートは2010～2015年度の6年間、毎年の授業において使用したが、黄緑色の期間の名として次のようなものが挙がった。

『子どもの世話から解放される時期』『夫婦二人の時代』『仮面夫婦の始まり』『第二の人生を考えると』『人生の折り返し地点』などである。これらのワードはその立場にならないと出て来にくい言葉であるが、人生を一枚の紙に可視化し概観することから、学生たちは自分の親の世代の暮らしにまで想像力を働かすことができた結果である。

子育てや会社勤めを終えるとまもなく終焉を迎えた大正期の人生と異なり、現代では長い老齢期（この言葉自体に再考の余地があるが）を含めて人生設計する必要があること、さらに人生の選択肢が多様な現代では、平均的なライフサイクルに当てはまらない場合も多く、住環境の提案の際にも対象者のライフスタイルやライフステージの理解が基本にあることを、学生たちはこのワークシートから学ぶことができたと思われる。

2-2. あなたのライフサイクルとライフステージ

ライフサイクルの変化について時代的背景を学習した後の取り組みである「あなたのライフサイクルとライフステージ」のワークシート（図3）において、2010年度25名、2011年度25名の2年度分計50名の学生の自由記述を集計し分析した。

自由記述の項目は、5年前・現在・5年後・20年後の自身の暮らしについて、どこでだと暮らすか、仕事や身体の状態、夢中になっていること、趣味、携帯電話のアドレス帳の登録数、家族の変化などである。ライフステージ毎に振り返りや予測・希望することを通して、暮らしの変化への気づきをねらいとしている。自由に記述するワークシートに表れる、学生たちの生活観や家族観、就労への意識などを分析する。

現在の暮らしでの家族構成は、親+兄弟姉妹の核家族が76%、一人+姉妹暮らし6%、祖父母を含む三世代が18%である。今夢中になっていること・趣味は、ゲームや読書・音楽鑑賞・DVD鑑賞などの主に室内での内向き趣味が50%、食べ歩きやドライブ、ショッピングなどの外向き趣味が19%、アルバイト15%、スポーツや勉強など学生生活が15%で続いている。人間関係の広がり示すと考

	5年前	現在	5年後	20年後
年齢	13	18	23	38
どこに住むか	世田谷区	世田谷区	世田谷区	伊豆か海に近い
だれと暮らすか	父母・姉	父母・姉	父母	夫、子2人
学校・仕事	中学2年	短大生	社会人4年目	専業主婦から仕事復帰
からだの身体状況	とても健康	健康 肩が痛い 腕が少し痛い	ストレス 肩が痛い	健康 だいたい
夢中になっていること	音楽	ブログ	仕事 (インテリヤテ)	子育て
趣味	ラジオ	音楽鑑賞 映画 ゲーム	DVD鑑賞 アニメ	同じ ゲーム
アドレス帳の登録数	なし	約120件	約150件	約180件
その他 家族の変化		父の健康 姉の結婚 母の健康	姉の結婚 父の退職 母の健康	孫の誕生 姉の結婚 母の健康

図3 「あなたのライフステージ」記載例

えられる携帯電話の登録アドレス数は、最小30から最大で300と幅があり、平均115である。
家族観について（図4）

5年後と20年後に「だれと暮らすか」では、5年後は現在の核家族17%、現在の三世代家族7%、一人暮らし40%、夫、彼女など新しい家族36%である。20年後は、現在の家族6%、一人暮らし4%、夫と子どもなど新しい家族90%である。学業を終えたら親元を離れて独立し、自分の新しい家族を形成するという従来の家族観が多いことがうかがえる。また、多世帯同居指向も少数であるが存在している。20年後は想像するのが難しい学生もいたが、希望を書くよう促したところ空欄のままの学生はいなかった。

職業観について（図5）

5年後と20年後の「学校・仕事」では、5年後は現在学んでいる専門性の活かせる専門職（住居系ではインテリア関係、ファッション系ではアパレル関係など具体的な職種の記述があるもの）が20%、その他会社員や事務などの一般職35%と就労意識は高い。20年後では、専門職は8%、一般職27%と5年後の記述の40%と激減し、パートなどの不正規雇用14%、主婦45%、不明6%となる。

住意識・生活観

現在・5年後・20年後「どこに住むか」では、2年度50名中47名に記載があり、三時点が全て異なる記述（ABC型）が23%、5年後・20年後が同じ（ABB型）が30%、三時点に変化無し（AAA型）が26%、現在と5年後が同じで20年後が異なる（AAB型）17%、現在と20年後が同じ（ABA型）が5%であった。

5年後に夢中になっていることは「仕事」が36%となり、「スポーツ」「趣味」「彼女」などを抜いて最多で就労意識が高いが、20年後に夢中になっていることは「料理などの家事」や「子育て」が合わせて60%に登り、「不明」14%、「仕事」は2%（1人）である。

以上の結果から、学生にとって近い将来の自分の暮らしに希望を持ち想像することは比較的容易であり、就労意識が高く、5年後は仕事中心のライフスタイルになることを想像している

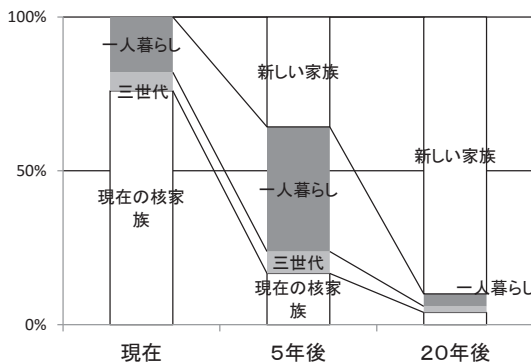


図4 現在と将来の家族像

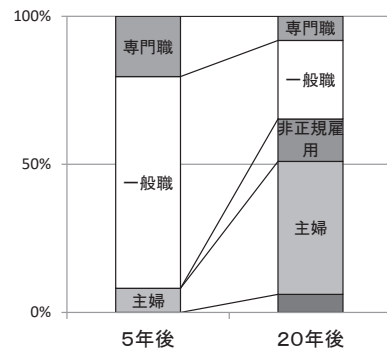


図5 将来の職業像

学生も多いことがわかる。しかし職業意識は20年後には大きく変化し、仕事より家庭指向が強くなる。20年後（38歳頃）の意識状況を想像するのは困難な作業であることもわかるが、本学科が目指す「仕事も家庭も」のライフスタイル構築には、学生の現時点での生活観とは隔たりがあることがうかがえる。学生たちが長期的なビジョンの基に職業を考えるには、未だ超えなくてはならない様々な要因があることが示唆された。また決して個人指向ばかりではなく、家族との関係性も見られ、多様化したライフスタイルの中にも従来の家族関係を大切にしていこうとする家族観も表れている。学生の自由記述から、暮らしの意識化の糸口を読み取ることができ、住意識やライフスタイルの傾向を知ることができた。

3. あなたの部屋を画いてみましょう

人の暮らしを理解し、人と空間、人と物との関係を知ることは、インテリアの学習の基本である。学生にとって一番身近な空間であり身の回りを取り囲む生活空間「私の部屋」を題材に、自分自身の暮らしを客観的に見つめ直しながら、空間や家具を計測し作図をする課題に毎年の授業で取り組んでいる。部屋のありのままの状況を作図し、さらに部屋にある家具や物を調べる作業を通して、部屋で行われる行為の種類や、一人の人の持ち物の量、その収納場所の必要性などへの気づきをねらいとしている。

6年間の課題提出物のうち、寸法の計測などの精度が比較的高い2011年度20名、2015年度29名の2年度分、計49名の課題を分析する。ワークシート作図例を図6に示す。

作図は、秋学期から始まる演習の授業の準備として、図面の読み方や作図上の基本的な決まり事を学んだ上で取りかかるが、寸法や縮尺は厳密でなくても、気軽に友達に自分の部屋を紹介するようにフリーハンドで画くよう学生に促している。半ば感覚を頼りに描いた後に、各自家で部屋の縦・横の内法（うちのり：内側の有効寸法）や天井高、窓や扉の位置と家具などの寸法を計測し、再び作図内容を見直している。

3-1. 私の部屋のスケルトン

建築空間はシェルターとしての構造体である「スケルトン」と建物の機能を果たすための「インフィル」で構成されている。スケルトンは、水平方向には床と天井、垂直方向には壁、開口部（出入口や収納の

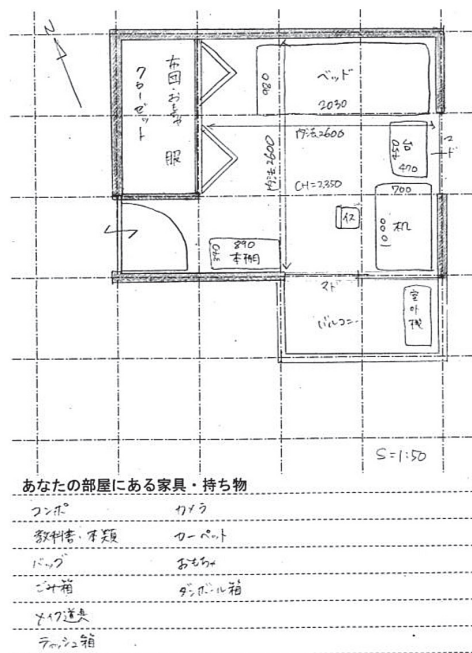


図6 「あなたの部屋」作図例

扉、窓など)がある。この部分は学生にとっては、自分の部屋とはいえ他者から与えられた条件であり、自分の好みによって手を加えることは難しい。作図に記載された部屋の内法の数値や開口部の位置から、部屋のスケルトンを分析する(表2)。

2年度49名の私の部屋の内法による床面積は、最小3.24㎡～最大19㎡、平均9.29㎡(標準偏差3.14)である。2011年度と2015年度の各内訳は表3に示す(以下の項目も同様)。最小の例は、寮生活の学生のベッドと最小限の収納しかない部屋であり、最大の例は、親元を離れた一人暮らしの学生のワンルームの住居から、調理空間などを除いた例である。前提条件が異なるため標準偏差は大きくなっている。内法による床面積9.29㎡は、壁芯による床面積に換算すると約9.78㎡であり、およそ6畳弱の部屋が平均的な広さと考えられる。なお、これらの部屋を兄弟姉妹らと共有している例が、2011年度3例/20、2015年度5例/29あるが、一人当たり面積としての換算はしていない。

部屋の外周の長さは、最小7.2m～最大17.6m、平均12.23m(標準偏差1.99)である。最小の例、最大の例とも面積の例と同様である。部屋の壁率は、部屋の外周から出入り口や収納のための開口、窓などの開口部分の平面上の長さを差し引いた壁の長さを、部屋外周で除した値である(=部屋の壁の長さ/部屋外周)。壁率は開口部の少ない部屋ほど大きな値となり、最小0.39～最大0.85、平均0.60(標準偏差0.10)である。

2011年度と2015年度の比較をすると、部屋の面積、部屋の外周とも増加している。部屋の壁率は、高い数値の部屋ほど開口部の位置に影響されずに家具のレイアウトや壁の装飾に工夫をしやすいと考えられるが、4年間の特筆すべき変化は認められない。部屋の出入り口はふすまや引き戸の例から、ドア一つの例がほとんどになった一方で、部屋に付設されるクローゼットなどが増えているなどの傾向の変化はあるものの、収納の開口寸法の明記がなく読み取りが困難な例も多いため、明らかな数値の変化として確認するには至らない。

表2 私の部屋の内法面積と壁率(2011年度と2015年度)

	部屋内法面積		部屋外周		部屋の壁率	
	2011年度	2015年度	2011年度	2015年度	2011年度	2015年度
最小	3.24 (㎡)	5.42 (㎡)	7.20 (m)	9.54 (m)	0.39	0.42
最大	11.27 (㎡)	19.00 (㎡)	13.84 (m)	17.60 (m)	0.78	0.85
平均	8.48 (㎡)	9.85 (㎡)	11.77 (m)	12.55 (m)	0.59	0.60
標準偏差	1.59	3.8	1.35	2.29	0.10	0.10

3-2. 私の部屋のインフィル

「インフィル」は、建物に付帯し一体となって機能を果たす付帯設備と、内部に据え置かれて機能を果たすインテリアとからなる。私の部屋に置かれる家具や照明器具、カーテン、じゅうたんなどは、その配置方法などは住み手の考えにより選択が可能であり、部屋の主である学生の意思を汲み取ることができると思われる。部屋の中にはさまざまな家具が記載されている

が、自分の部屋で行われる生活行為：睡眠と学習の道具であり多くの学生の部屋に画かれている、ベッド（または布団）と学習机について分析を試みた。

ベッドと学習机で行われる行為には、睡眠と学習以外にも、様々な学生のプライバシーに関わる行為があると思われる。それらの行為の最中の自分からの視界と、出入口や窓からの他者からの視線、または採光、音などへの配慮が、ベッドと机の部屋の中でのレイアウトにとって重要な要素となる。そこで、ベッドでは、部屋の出入口との関係として、A. 出入口と直角か、B. 出入口と平行か、窓との関係では、a. 窓と直角か、b. 窓と平行かで分類した。なお枕（頭）位置については特定できない例が多く、ベッドの配置方向のみを対象としている。学習机は椅子の存在から向きが特定できるため、部屋の出入口との関係として、C. 出入口と直角か、D. 出入口に向かって平行か、E. 出入口に背向けか、窓との関係では、c. 出入口と直角か、d. 出入口に向かって平行か、e. 出入口に背向けかで分類した。出入口や窓が複数ある場合は主な出入口や最大開口の窓を対象にした。分析結果を図7に示す。

ベッドの位置は、出入口とは平行（60%）で、窓とは直角（53%）にレイアウトする例が、その逆の配置よりも若干多い。若干の差であるのは、部屋の縦横の寸法との関係で、実際には選択の余地がない例も多いためと思われる。机の位置は、出入口と直角（71%）で、窓とも直角（76%）の配置が7割以上を占め、他の配置よりも好まれることがわかる。机の配置で出入口に背向けや窓に背向けの例は、兄弟姉妹などと同室の例に多く見られ、限られたスペースに複数の机を距離を持って配置しようとした結果と思われる。

次に2015年度の29名の学生の作図に反映された、家具の主な物とその割合を図8に、また2010年度から2015年度の家具の変化で、特徴的なものを図9に示す。学生の8割以上が持つ

		ベッド(布団)の位置			机の位置	
		A. 出入口と直角	B. 出入口と平行	C. 出入口と直角	D. 出入口に向かって平行	E. 出入口に背向け
出入口との関係						
		40%	60%	71%	21%	7%
窓との関係						
		53%	47%	76%	10%	14%

図7 私の部屋 家具の位置の分類

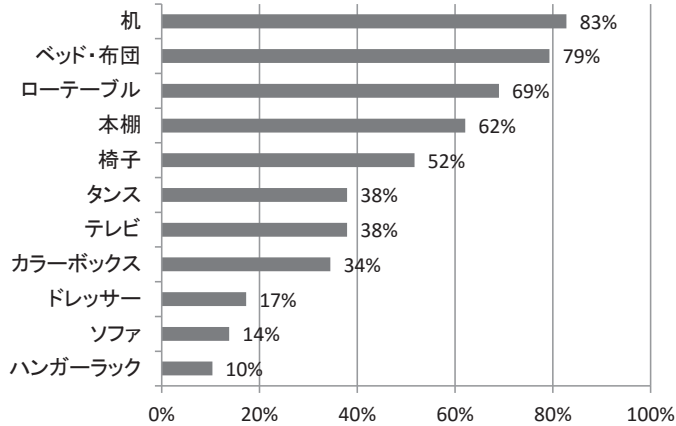


図8 私の部屋にある主な家具 (n=29)

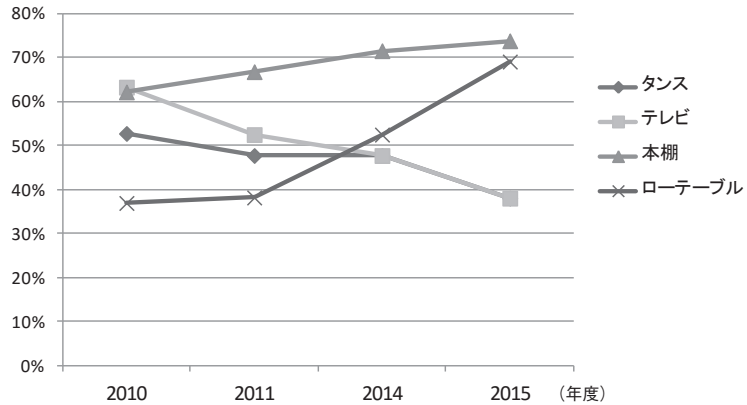


図9 私の部屋にある主な家具数の経年変化

机は、主に学習机と判断できる物である。その大きさから椅子がセットであると思われるが、椅子は認識されにくいのか画かれていない例もある。椅子が画かれている例においても、そのスケールは机に比して総じて小さく描かれている。机を持たない学生は自分の部屋で勉強はしないのかと問うてみると、ローテーブル（いわゆるちゃぶ台）がその役を担っているようである。自分の部屋に机とテーブル両方を持つ学生は、ローテーブルでは化粧や飲食などくつろぐときの台としての使用が主である。その他、部屋にある家具としてはチェスト、全身鏡などがある。

2010年から2015年で増えている家具として本棚とローテーブルがあり、特にローテーブルは2010年度は37%の学生の部屋に画かれているのが、2015年度には69%に増えている。机はどの年度も80%前後とあまり変動していないことと考え合わせると、自分の部屋の中に学習以外の行為がたくさん持ち込まれてきていることが想像できる。経年で減っている物として

は、テレビとタンスがある。テレビは2010年度は63%の学生の部屋に画かれているが、2015年度では38%に減少している。これはパソコンや携帯電話の画面でも代用できるなど、家電製品の技術の進化と関連が深いと考えられる。タンスの減少は、学生たちが持つ洋服が減ったわけではなく、クローゼットやチェストなど洋服収納の家具の種類が増えて、タンスという名称を使わなくなったことが原因と思われる。

4. 家電製品とライフスタイル

私たちの生活の様々な行為は、それを行うための家具や道具がないと成り立たないことが多い。住まいの中の家事行為は、戦後のテクノロジーの進化により大きく変革し、家庭における家族の役割や家事労働のあり方へまで影響を与えている。住まいに限らず空間のインテリアを考える際にその場に必要とされる道具とその配置や収納、管理についての認識と知識が必要となる。

このセクションでは身の回りにある家電製品の実態を把握することを通じて、生活財の種類などについて知るための導入として用いた2015年度の30名のワークシートを分析する。図10に記載例を示す。

授業中の約15分を使って、家族と住む家の中の家電製品について思いつくまま書き出し、物の場所と数、家族共有か個人使用の物かに分け、さらに買い換えたいと思っている物や廃棄したい物とその理由を書き出している。ワークシートには28の項目が書けるよう罫線があるが、大半の学生が短時間で20以上の家電製品を書き出すことができ、学生どおしの声かけからさらに発見に繋がり、日常的に使用している家電製品の多さに驚く結果となった。ワークシートに挙げられた家電製品を生活行為・用途別に分類し、その総数を示す(表3)。

各家庭に持ち帰って行う調査と異なり、実態を正しく把握したものではないが、30を超えているエアコン(65)、扇風機(56)、テレビ(50)、パソコン(42)、ドライヤー(42)、掃除機(31)については、一家に複数あると読み取ることができる。また、学生が短時間で想起しやすい家電製品として、身支度や趣味の領域に属する製品が多種にわたって挙げられている。

挙げられた家電製品の中で、個人の部屋に置かれている空調以外の物として多いのは、アイロン42%(10/24)、ミシン40%

1. あなたの家(家族と共に住んでいる家)にある家電製品と数を書き出してください。
 - ① 家電製品の名称を書き出す
 - ② 家族全員で使うもの・個人が使用しているものに分けて、その場所と数を書く
 - ③ 買い換えたいと思っているものに○をつけ、その理由を書く
 - ④ 廃棄したいと思っているものに×をつけ、その理由を書く

① 家電製品	② 家電製品の場所と数		③ ○買い換えたいもの
	家族共有	個人で使用	④ ×廃棄したいもの
記入例) テレビ	リビング 1	父の部屋 1 私の部屋 1	○居間のは大画面の物に替えたい ×私の部屋のは見ないため
電子レンジ	キッチン 1		
冷蔵庫	キッチン 1		○もう買ってる
トースター	キッチン 1		
ヘアアイロン	廊下 1		
アイロン	リビング 1		
電気	リビング 1	母の部屋 1	
扇風機	廊下 2	お部屋 1	
洗濯機	リビング 2	お部屋の部屋 1	
ミシン	押入れ 1		
電子レンジ	キッチン 1	お部屋の部屋 1	
扇風機	押入れ 1		
掃除機	お部屋 1		
電子レンジ	リビング 1		○最近古い手裏い
ミシン	お部屋 1		× 昔の型に修理済みから
布団乾燥機	押入れ 1		
換気扇	キッチン 1		
洗濯機	洗面所 1		
パソコン	リビング 1	父の部屋 1	
ドライヤー	リビング 1	お部屋の部屋 1	
CDレコーダー	リビング 1	自分の部屋 1	
集中電灯	リビング 1	父の部屋 1	
エアコン	リビング 1	お部屋の部屋 1	
DVDプレイヤー	リビング 1	父の部屋 1	
ホットカーペット	リビング 1	お部屋の部屋 1	
ヘアードライヤー	リビング 1		
電気掃除機	お部屋の部屋 1		× いろいろ買っちゃった
吹風機	キッチン 1		

図10 「家にある電化商品」 記載例

表3 家にある電化商品 行為別一覧 (n=30)

調理	掃除・衣生活	空調	音楽・楽器	その他
冷蔵庫 30	掃除機 31	エアコン 65	スピーカー 7	照明器具 12
炊飯器 30	ルンバ 1	扇風機 56	ステレオ 3	時計 3
電子レンジ 27	洗濯機 29	ホットカーペット 19	電子ピアノ 2	インターホン 2
トースター 23	乾燥機 1	ストーブ 17	ギター 3	防犯カメラ 1
ポット 19	布団乾燥機 1	こたつ 10	アンプ 1	鉛筆削り 2
ホットプレート 13	アイロン 24	加湿機 7	ベース 1	懐中電灯 2
オープン 10	ミシン 15	空気清浄機 1		充電器 17
ミキサー 9				
たこ焼き器 9	身支度・整容	情報・通信	音楽・映像再生	ゲーム機
食器洗い機 6	ドライヤー 42	テレビ 50	CDプレーヤー 12	ゲーム機 4
ホームベーカリー 5	ヘアアイロン 23	ラジオ 6	DVDプレーヤー 22	プレステ 4
IHコンロ 5	洗淨便座 14	電話 30	音楽プレーヤー 5	PS・PSP 4
コーヒーマーカー 3	コテ 11	スマホ・iPhone 21	ウォークマン 3	3DS・DS 4
泡立て器 1	ひげそり 4	Wi-Fi・ルーター 3	iPod 5	Will 4
電子はかり 1	電動歯ブラシ 3	パソコン 42		
浄水器 1	スチーマー 1	コピー機 10		
	体重計 4	プリンター 4		
	マッサージ機 6	iPad 4		
	JOBA 1	ハードディスク 2		

(6/15)、ヘアアイロン43% (10/23)、コテ82% (9/11)、ひげそり75% (3/4)、テレビ38% (19/50)、パソコン50% (21/42)、音楽・映像再生系40% (19/47)、ゲーム機系65% (13/20)である。音楽・楽器系のうち楽器はすべて個室にある。

さらに個人の部屋に置かれる物から「私の部屋」に絞り、家電製品を行為別に見ると(図11)、CD・DVDプレーヤーやゲーム機は、リビングなどで家族とともに楽しんでいるのではなく、身支度に関わる行為も洗面所などより、自分の部屋で自分だけの道具を用いている学生たちの日常生活が浮かび上がる。

以上の分析から家族と暮らす生活にあっても、趣味や情報・通信、身支度、衣生活に関わることまで、広く個室に道具が持ち込まれ、生活行為の個人化が進んでいることがわかる。

家にある家電製品の中で、「買い換えたい物」としては、テレビやパソコン、エアコンなどが多く挙がっている。その理由としては、『古いタイプなので』『高性能のものに』などであり、壊れて使えないという理由はわずかである。

一方「廃棄したい物」としては、マッサージ機などの健康器具、ゲーム機、ミシン、鉛筆削りなどが挙がっている。その理由としては『もう使っていない』『必要ない』など、家電製品の物理的耐用年数よりも、使う人間側のライフスタイルに起因する項目である。

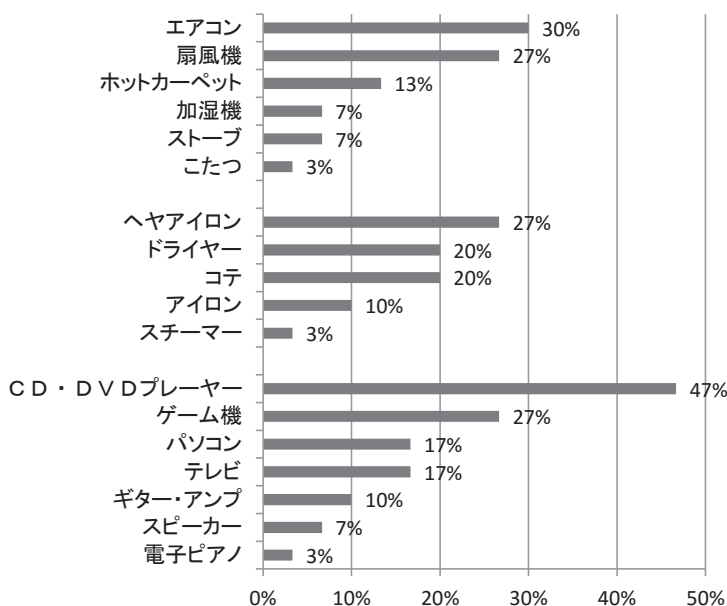


図11 私の部屋にある電化商品

IV. まとめ

以上のように、生活科学科の講義「リビングデザイン論」では、住居やインテリアを学ぶ導入として位置づけ、学生たちの暮らしや身の回りの住環境を題材に、取り組みやすい作業から始まり、自分の生活を客観視することを目的とし、次のステップに進むような学習計画とした。学生自らの気づきと考察を促し、課題の計画や提案に繋がられるような仕組みを考えて授業計画を工夫してきた。

それらの学生の作業から、学生とその家族のライフスタイルが表現され、6年間に渡るライフスタイルの変化も読み取ることができた。すなわち、一般的に言われる個人化が進み、内向き指向である一方、家族との関係にも気を配る傾向が本学の短大生にも見て取れた。それらのことから今後の住空間やインテリアを考える上で、個々のプライバシーや人との関係性と距離感の確保、さらに物や家電製品とのつきあい方などの示唆を得ることができた。本講義の内容と同様の取り組みを、他の教育機関や異なる年齢層で行った結果と比較研究をするなどの方法において、本稿で得られたデータの分析を深めていくことが今後の課題である。

学生の学びの効果については、数値化などで可視化することは困難であるが、個々のワークシートとその後の学習の理解度や、最終課題⁴⁾や演習授業での思考のまとめ方や表現方法に表れていると考える。さらに卒業後の就職、その後の各々の社会人生活や家庭生活などのライフスタイルの構築により、賢い住み手としての基礎力をリビングデザイン論の学びから習得できたことが、将来、数年後または十数年後に、学生一人一人の暮らしの中で明らかになることを願っている。

【注】

- 1) 2013年度より「インテリアフィールド」に改組し、フィールド名も改められている。
- 2) 目白大学短期大学部生活科学科 ディプロマポリシーからの引用。
- 3) 厚生労働省大臣官房統計情報部「人口動態統計」等より作成の「統計でみた平均的なライフサイクル」と最新統計情報を基に筆者が作成した。
- 4) 浅見美穂：短大生の住意識についての研究—ルームシェアの課題提出物の分析から—，目白大学短期大学部研究紀要 51号 において詳述している。

【参考文献】

- 1) 後藤 久：リビングデザイン，実教出版，2015. 3.
- 2) 定行まり子・沖田富美子 編著：生活と住居，光生館，2013. 4.
- 3) 図解住居学編集委員会 編：図解住居学6 住まいの管理，彰国社，2003. 12.